

今回は「存在」と「一」という存在論の基本問題に即して主題への接近が試みられたが、提題者の報告においてあきらかに読みとられるごとく、アリストテレスとトマスは「存在と置き換えられる一」について語る点において同じ道を歩いているように見えながら、両者における「存在」理解に認められる著しい相違のゆえに、「一」についての理解にも微妙ながら重大な違いが見出される。その相違点を牛田氏は明確に指摘し、山本氏はそのような相違の根底にあるトマス独自の存在理解にふれている。そのことを第一回のシンポジウムの成果として評価したい。

提題 アリストテレスにおける「^{オン}存在」と「^{ヘン}一」

牛 田 徳 子

以下において、(一)、アリストテレスの「存在」と「一」の概念（以下オン、ヘンと記す）について行なった報告を要約し、(二)、アリストテレス（以下 Ar）の理解を前提したならば、トマス（以下 Th）の超越概念論がどのように解釈されうるかを論じた二回目の報告を要約し、最後に (三)、私が提起した問題と会場の内外から寄せられた問題の若干のものに触れることにしたい。

(一)、紙幅の関係上、Ar のもっとも基本的な四つのテキストをあげ、短いコメントを加えるにとどめる。

(1) 「オンとヘンが同じであり、一つの本性^{ビュシス}であるのは、それらが互いに随伴する点にあるのであって……一つのロゴス（ラチオ）で表わされるからではない」（*Met Γ2*. 1003 b 22-1）。両者の論理的相互随伴性は外延が等しいことである。しかし意味論的には両者はそれら自体が同じ対象を表示するわけではない。たとえば、或るものを指して「それは一人の人間だ」と言おうと、「それは有る人間だ」と言おうと、「それは人間だ」と言う場合となにも違ったことを言っているわけではない。両者は任意の通常の語に付加されたり、付随するとき、その通常の語が表示すると同じものを表示することで互いに等値な語なのである（cf. *ibid* b26-32, *I2*. 1054a 16-19）。

(2) 「(A) どのようなものが一つと言われるか、という問題と、(B) 一つであることとは何であるか、ヘンのロゴスは何であるか、という問題が同じ仕方では語られると取ってはな

らない」(I 1. 1052 b 2)。Ar はオンのロゴスを与えていないけれども (パルメニデスの影響か)、彼のヘンの定義づけはきわめて示唆的である。いま、それにおいて何かが一つと言われるところの不可分な本性を X とすれば、問題(B)は X のいかなる特定化も排するところに成りたつ。ヘンのロゴスは「各類の第一の尺度^{メτρον}であること」(ibid b 18; cf. Δ6. 1016 b 17-21, N 1. 1087 b 33) である。ヘンは数の原理であるモナスから由来したものであるけれども、数の領域を越えて、分量の範疇 (e.g. 長さ、広さ、深さの類) において、さらに運動の範疇 (e.g. 重さ、速さの類) においても、性質の範疇 (e.g. 音、色の類) においても、実体の範疇 (e.g. 人間、馬の類) においても、インター・カテゴリー的な妥当性を得ている (cf. I 1. 1052 b 18-30, 2. 1053 b 25-1054 a 13, N 1. 1087 b 34-1088 a 14)。

(3) 「ヘンとオンが或る意味で同じものを表示することは次の点でも明らかである。ヘンは諸範疇と等しくそれらに付随し、かつそれらのどれにも含まれない。たとえば「何であるか」の範疇にも、「どのような」の範疇にも含まれず、それらに対してオンがあると同様な関係にある」(I 2. 1054 a 13 一)。すなわち両者は、或るものの定義が類を含むような仕方^(注)で当のものの本性に含まれることもなく、或る属性の本性がその基体を含むような仕方^(注)で当の属性の本性に含まれることもない。

(4) 「およそ思惟的であれ、感覚的であれ、質料をもたないものはそれぞれ、ただちにまさに或る一であるところのものである。それは、それぞれがまさに或る存在であるところのもの、(たとえば) これ、しかじかのような、しかじかほどのものであると同様である。それゆえそれらの定義のうちにはオンもヘンも含まれないのである。そして (それぞれの) 本質はただちに或る存在であると同様に、或る一である。それゆえそれらの各々が或る一であること、或る存在であることには、そのこと自体のほかになんか原因もないのである」(Met H 6. 1045 a 36-; cf. Γ 2. 1003 b 32-34, Phys A 3. 187 a 9)。

オンとヘンは、全範疇をオーバーラップする (cf. (3)), 最大の普遍述語である (Met I 2. 1053 b 20, Γ 3. 1005 a 27, Top Δ6. 127 a 27, 33) が、類概念ではない (Met I 2. 1053 b 22, H 6. 1045 b 6) から、その主語 (ある、一つと言われるすべてのもの) について一義的に妥当せず (cf. Soph El 33. 182 b 24-27), またいかなる事物・事象の本性も構成しない (Met Z 16. 1040 b 18, I 2. 1054 a 10, N 1. 1088 a 3; cf. (3))。そこから Ar は、オンとヘンを属性述語化する自然学的思考と実体本質化する

形而上学的思考の間のトリヴィアルな対立 (B2. 996 a 4-9, 4. 1001 a 4-b 6, I 2. 1053 b 11-16) を克服して、 $\dot{\text{一}}\dot{\text{つ}}$ として例外なく、 $\dot{\text{あ}}\dot{\text{り}}$ とあらゆるもののそれぞれが或る存在であること、或る一であることと直接同一であって、そのこと自体のほかになんか原因もない、と考えるのである。オンとヘンはトランス・カテゴリーに、あまねくすべてのものに等しく妥当する原理概念であって、この概念の確立こそ Ar の存在論の成立根拠であったと言わなくてはならない。

(注) 「資料をもつもの」に関しては *Met H 6. 1045 b 19-22, I 2. 1003 b 29-30* を参照。

(二) 以下、*De Pot 9.7, De Ver 1.1, Summ Theol I. 11. 1-4* における Th の論述を基にして検討する。

‘*Ens et unum convertuntur*’ の淵源が Ar の上記テキスト(1)にあることはまず間違いないところであろう。次の一般定式においては Th は Ar と一致している。“エンスとウナムの間に置換性が成立するのは、ラチオの上ではなく(それゆえ両者は^{シノニム}同義でない)、ただ事物の上のことである(すなわち両者が表示する事物は同じである)”(cf. *De Pot 9. 7, ad 13*)。

しかしながら Th は、エンスに対してその一般様相として付随する他の超越概念の関係、後者が前者のラチオを含み、それにラチオを付加するという関係を説くが、このような思考は Ar には存在しない ((-), (1) における彼の「付随」「付加」の用語法を見よ)。また Th は、以上のような関係は思惟・認識上の先後関係であって、事物上の関係ではないから、エンスの機能を制約しない、と考えるが、これも Ar には存在しない。

以下、超越概念の認識の順序を記述する *De Ver 1. 1* のテキスト四箇所を検討する。(1)「知性が最初に、もっとも知られたもの(自明なもの)として把握するもの……それはエンスである」。Th がこの言明でもってエンスの定義を意図したかどうか不明であるが、そう仮定するなら難点があろう。知性は認識的アニメマであって、一つのエンスであるから、この“定義”には循環が避けられないであろう。また知性がまだエンスとして把握されていないとしても、知性は一つの事物であるから、それをエンスのラチオに導入するのは超越概念の資格に反することになろう。さらに知性によるエンスの把握にはヴェルムが成立しているはずであろう。しかるにエンスはヴェルムを含意しないのであ

った。

(2)「エンスは *actus essendi* から取られるが、レスの名はエンスの *quidditas* ないし本質を表わす」。Th には被造物における *esse* と *essentia* の実在的区別の説がある。それに従えば、エンスとレスは被造物については置換されず、ただその *esse* と *essentia* がラチオの区別であるとされる神についてのみ置換されるであろう。さらにレスが「エンスの本質」という複合的ラチオをもつならば、それは被造物における異なる原理を指す二義性をもつことになるろう。

(3)「不可分なエンス」としてのウヌム。Th は *Summ Theol, De Pot* において、数、分量、質料の分割・非分割を排除して、ウヌムの不可分性は形相、本質から取られるべきであると主張するが、これはまったく Ar 的でない（上記(一)、(2)参照）。また、形相が事物の構成要素であるなら、エンスには事物の本性を付加されることになるろうし、ウヌムはすべて分量的に不可分であるのをもはや指すことができず、その最大の普遍性に反することになるろう。

(4)「アニメには認識能力と欲求能力が含まれる。それゆえ、エンスと欲求の合致をボヌムの名が表わす……それに対してエンスと知性の合致をヴェルムの名が表わす」。ここには特定の事物であるアニメに「すべてのエンス」と合致させる特別な地位が与えられている。エンス、ウヌムと置換さるべきヴェルムとボヌムを成立させるアニメー精神とは何であろうか。

一般に超越概念の相互置換性が成立しうるのは、それらがいかなる事物の本性も含まないからである。Th が認識のレベルを事物のレベルから区別しただけでは十分とは言えない。なぜなら、もし事物の認識から超越概念を導出したなら、必然的に超越概念は事物のラチオを含み、不置換性が起こりうるのは避けられないからである。

㊦、諸問題

(1) Ar と Th を隔てる千五百年はあまりにも長い。両者を直接比較しようとすれば、上述のような抽象議論にならざるをえないであろう。しかし、生きた思想の変遷を求めようとするならば、Ar 以後興ったストア主義、新ピタゴラス主義、新プラトン主義、ユダヤ思想、イスラム哲学、教父学、などにおける思考の推移を迎ることが不可欠であろう。それは本報告の範囲を越えている。ここで示唆できるのは次の一点である。Th は神名論、三位一体論などの神学的枠組のなかで超越概念を扱う立場におかれていた。

その立場には、唯一、単純、最大な超越的事物（神）の完全性から、エンスその他の超越概念を導出しようとする傾きがあると思われる。そこから「最大に第一のもの」(*De Pot* 9. 7, ad 6)と言われるエンスが、最大、完全なエンス、*esse* そのものと言われる神と同一視される結果が生じてくるのはさほど困難なことではなかろう。それはまた超越概念思想そのものの衰微を促す要因にもなろう。しかしオンを唯一の事物的本質とみなす形而上学的思考を Ar はパルメニデス-プラトンの的としてもっとも強硬に反対したのであった。存在思想の源泉を明確に捉えておくのは、さまざまな支流が流れこむ「存在の大河」を見極めるために必要なことであろう。

(2) Ar がオンとヘンは事物の本質・本性でない主張するのは、それらが特定の実在物と対応することがないからである。さもなくば、それらがどんなものにも無差別的に述語づけられることはないであろう。しかし実在論的立場において、オンとヘンが全実在に対応すると信ずることはできる。なぜならその立場からすれば、それらが実在からのなんらかの抽象であるはずだからである。しかしそれを証明することはできない。われわれがそれらを使って実在論を立てるオンとヘンを、どうして実在論的に証明できるであろうか。それゆえオンとヘンは実在論の根拠であり、最大の存在論的原理である。オンとヘンほど中身の希薄な原理はないであろう。しかし、神すらも包括できるような、その外延は恐しいまでに無際限に広く、深いと言うべきであろう。

(3) あると言われるものの無際限な広さ、深さを、Ar は「あらゆるものは無条件的にあるわけではないが、或るあらゆるものであることにはなんらの妨げもない」(*Phys* A3. 187a 5; cf. *Met* Γ2. 1003 b 10) という言葉で表現している。あると述べられるだけの世界は「可能世界」を含むことができる。したがって存在論的認識が架空を生みだす恐れは排除できない。それに対して神の無からの創造的認識はただ実在を生みだすであろう。

提題 トマス・アクィナスの「在るもの」と
「一」との置換説

山本耕平

「在るもの」(ens) と「一」(unum) とは置換 (convertere) される。「在るもの」